

亡くなって感じる「殿様」の实在

～5 代藩主黒田直温(なおあつ)の葬儀から～

学芸職員 尾崎 泰弘



画像 1 黒田直温画「福祿寿」図

江戸時代に現在の市街地を治めていた上総国久留里藩黒田家。能仁寺はその黒田家の菩提寺として栄えました。5 代目直温は、父直英が天明 6(1786)年 7 月 18 日に 28 歳(数え年、以下同)で亡くなると、わずか 3 歳で藩主となりました。幼名は鶴松といい、相続して直義と名乗りましたが、寛政元(1789)年 8 月に直温と改め、寛政 11(1799)年 12 月には従五位下大和守に任ぜられています。直温は幼少より絵筆に親しみ、余暇を利用しては山水の絵を描いたとされ、当館所蔵の「福祿寿」図(画像 1)をはじめいくつかの作品が伝来しています。

直温が死去したのは享和元(1801)年のことで、17 年間の短い生涯でした(画像 2)。公式には 8 月 12 日となっていますが、実際には 7 月 24 日には没していました。しかし、叔父の黒田十五郎(直服、後の 6 代藩主直方(なおまさ)、24 歳)への相続願が老中に認められたのが 8 月 11 日のことだったので、その翌日に亡くなったことになっています。



画像 2 黒田直温墓(能仁寺)

直温の遺骸は、8 月 14 日酉ノ中刻(午後 6 時頃)に江戸下谷の上屋敷を出発し、翌 15 日未の下刻(午後 2 時頃)に能仁寺に到着しました。葬儀は翌 16 日に行われましたが、15 日には黒田家の家臣はもちろん、黒田家の縁戚にあたる大名、旗本などからも弔問の使者が飯能に到着していました(表)。双木利夫家文書「享和元年賢良院様御酒代廿ヶ村割」(No.1031)を見ると、家老の大森六郎左衛門など上級の家臣たちは寺に入っている一方で、縁戚からの使者やそれ以外の家臣たちの宿は、飯能町の有力者の家が宛てられていました。例えば駿河国田中藩主本多忠意(ただおき)の使者は飯能村名主大河原又右衛門宅、近江国大溝藩主分部左京亮光

実の使者は久下分村名主金子忠五郎宅、陸奥国弘前藩主津軽越中守寧親の使者は真能寺村名主玄珉といった具合です。そのほか埋葬するための穴を掘ったり、「御土囲」を築く、あるいは墓石を運ぶ人足などが入間・高麗郡の黒田領 20 ヶ村から動員され、藩主の葬儀にあたっては多くの方が飯能の町に集まって来ていたのです。

黒田家は上総国に居城があるため、飛地である高麗郡村々の人々が「殿様」と接する機会はほとんどありません。藩主が能仁寺に参詣したのは、今のところ享保

4(1719)年春の初代直邦、文化 12(1815)年 8 月 17 日の 7 代直候、天保 12(1841)年 8 月の 8 代直静、文久 3(1863)年 8 月の 9 代直和の 4 回に過ぎません。藩主の葬儀は飯能周辺の黒田領の村々が「殿様」の存在を強く感じさせられる数少ない機会だったのではないのでしょうか。

【参考文献】飯能市史編集委員会『飯能市史』通史編 飯能市 昭和 63(1988)年/坂口 和子編『武陽山能仁寺』武陽山能仁寺 平成 3(1991)年/上総古文書の会『御明細録-上総久留里藩主黒田氏の記録-』平成 18(2006)年

5 代黒田直温(賢良院)の葬儀に使者を派遣した縁戚

	藩名	石高	続柄
本多豊前守(正意)	駿河国田中藩	3万5千石	2代直純実家
分部左京亮(光実)	近江国大溝藩	2万石	
津軽越中守(寧親)	陸奥国弘前藩	7万石	母は直純娘
中山要人(直興)			
堀内蔵頭(直咄)	信濃国須坂藩	1万石	妻が3代直享娘(継室)
鳥井(居)久五郎(成純)		2,500石	妻が直享娘
三十郎(黒田直清)			直享四男、のち黒石藩初代藩主甲斐守親足

表